



# AJWCEF News Letter

Vol.23 2021年5月号

## ご挨拶

オーストラリア日本野生動物保護教育財団会員及びご支援を頂いております皆様へ

皆様におかれましては、平素よりオーストラリア日本野生動物保護教育財団（AJWCEF）の活動にご理解とご支援を賜り誠に有難うございます。

さて、昨年より続いておりますコロナウィルス感染症は、未だに世界での感染拡大が続いており、治まる兆しが見えません。AJWCEFが本部を置くオーストラリアでは、幸い昨年暮れから市中感染がほとんどなく、稀に海外からの帰国者のための隔離ホテルや病院などで何らかの不幸によりウィルスが漏れ、従業員や医療従事者に感染し数人の市中感染が起りましたが、オーストラリア政府は即刻、短期間の地域限定ロックダウンを行いウィルスの拡散を防止すると同時に、徹底した検査により感染者の割り出しに努めました。例えば、AJWCEF本部所在地のブリスベン市でこのような状況が起こった今年3月中旬には、最初の感染者が確認された翌日からブリスベン市のロックダウンが即刻実施され、ブリスベン市だけで1日当たり最大4万人を超すPCR検査を実施し、その結果、市中感染は数人で止まり、その後の感染は認められません。このロックダウンも3日間行われたのち解除され、現在は通常の生活に戻っております。さらに、オーストラリア全域で下水中のコロナウィルス検査が定期的実施され、もし、ウィルスが発見された場合は、その地域に警告と検査要請が出されます。

また、予防接種は2月中旬から始まっており、日本同様、医療従事者や高齢者が優先的に接種を受けています。ただ、世界的にワクチンの供給が遅れており、オーストラリア国内でも生産を始めておりますが、接種状況は予定よりやや遅れているようです。私も4月中旬に1回目を接種いたしました。特別な手順はなく、インフルエンザワクチン接種などと同様に、自分で地域の医院で予約を取り、接種いたしました。

日本の状況をニュースなどで拝見いたしますと、感染の再拡大が顕著となり、3度目の緊急事態宣言や蔓延防止重点措置などの発出により皆様の生活がますます難しい状況になっているようにお見受けいたします。日本ではコロナウィルス感染症の制御、経済活動の維持、オリンピック開催のすべてを同時に行おうとされているように感じますが、「二兎追うものは一兎も得ず」という格言のようにならなければよいかと、心配をしております。

皆様におかれましては、くれぐれもご自愛いただき、近い将来、オーストラリアもしくは日本でまたお会いできることを楽しみにしております。

オーストラリア日本野生動物保護教育財団

理事長 水野 哲男



# 動物大好きな部屋

## -野生馬とオーストラリアンエコシステム 4-

このページでは AJWCEF スタッフ Yuko より 前回から引き続き、オーストラリアで Brumby(ブランビー)と呼ばれる野生馬がオーストラリアの生態系にどのような影響を与えているのかを考察していきます。

さて、前回まではオーストラリアの生態系を破壊するペストとして扱いを受けるブランビー達をご紹介してきましたが、その反面、動物保護活動家や愛好家、動物福祉団体からオーストラリア国の経済や歴史的文化遺産、リソース(資源)とした扱いを受ける姿もあります。

オーストラリアの固有動植物に悪影響を与えるブランビー達が破壊している生態系、また生物学的多様性の保護が必要であると唱えるブランビー反対派に対して、賛成派の主張も見ていきましょう!

賛成派の意見としては主に3つあります。

- ①ブランビー達は歴史的文化遺産である
- ②動物福祉の観点からブランビー達にも生きる権利がある
- ③生態系とのバランス、また自然環境保護につながる



皆さんは“Heritage Value”という言葉聞いたことはありますか? 直訳では“歴史ある古くから継承された価値あるもの”という意味になります。

### “ブランビー達は 200 年近くも培ってきた国の歴史的文化遺産である”

1788 年ヨーロッパからの入植、開拓を機に既に家畜化された馬達が人や物の輸送、移動手段、農耕目的にオーストラリアへ持ち込まれたのが始まりでした。開拓期に農耕馬・輸送馬として人々の生活を支え、第一次・二次世界大戦での兵役馬、ゴールドラッシュ時の運馬、警察馬として活躍してきた馬達が野生化したものがブランビーという認識が根底にあります。

では、動物福祉の観点からはどうでしょうか。オーストラリア国内にある多くのブランビー保護協会が以下のように提言しています。

### “ブランビー達に痛み・恐怖・苦しみから解放し、生きる権利を与えるべきである”

では、ここでオーストラリアのメジャーな動物福祉・虐待防止団体のひとつ、RSPCA という民間の非営利団体を例にとってブランビーに対する見解をみていきましょう。

まず RSPCA はブランビー達を Introduced Species(外来種)として位置づけ、ブランビーのことを Feral Horses としています。この時点でペスト(害獣)側に見解が寄っている、と察しがつくのですが野生下での管理方法に関しては以下のように提言しています。

**“人間の生活・健康・幸福、生態系に対して悪影響を与えることを防ぎ、個々の動物福祉を守ることを目的とし、野生動物の数を管理することは必要である。基本的に必要時には駆除を行うべきであり、駆除方法に関しては人道的に、なおかつターゲットを定め効率的に行うべきである。”**

ブランビー達の駆除に真っ向から反対する団体もいれば、このように動物福祉・愛護を唱っている団体であってもペストとして時と場合によっては駆除が必要と提言している団体も多いのが現実です。

保護の重要性を唱えるけれど駆除も必要とする動物福祉団体、またオーストラリア国内の各市町村も同じスタンスですが、ここで“人道的な方法での駆除”がポイントになってきます。

### 果たして“人道的な方法での駆除”とは何なのか?

☆次回に続きます☆



AJWCEF ホームページの「動物大好きな部屋」では様々な野生動物についてのお話をご覧いただけます! (<http://ajwcef.org/category/room-for-animal-lovers>)

# AJWCEF 卒業生突撃インタビュー

AJWCEF は創設以来、野生動物保護を大きな生態系の観点から捉え“人と自然のよりよい共存”について考える機会を提供すると共に、日本では経験することの難しい有袋類や単孔類の保護や救護に関する知識の向上、野生動物の治療・リハビリなどの臨床及び豊かな海洋生物の生息する亜熱帯の海域において海洋環境・生物保護に関する知識の向上や、参加者の皆様が海外で安全に生活するための基礎知識や実用英会話の向上も目的として、毎年、年に数回トレーニングコースを主催してきました。

トレーニングコースにご参加いただきました多くの方々の中では、このコースをきっかけにその後も野生動物保護や環境保全の活動に取り組んでいらっしゃる方もいらっしゃいます。その中でも今回は2014年にAJWCEF初級トレーニングコース（現在の基礎トレーニングコース）に参加され、その後、タスマニア大学に留学。この春に晴れて修士課程をご卒業されて日本へと帰国をされました田村樹理さんにお話を伺いました。



写真提供：田村樹理さん、ナラワンタブ国立公園 (Narawntapu National Park)で自分の研究のためのカンガルーとウォンバットの個体数調査をしている様子

オーストラリアの自然と動物が大好きだった私は、大学2年生の春休みにAJWCEFの野生動物保護トレーニング初級コースを受講しました。その時点で将来はオーストラリアで野生動物保護に携わりたいことを決めていましたが、どのような形で渡豪するかはまだ悩んでいました。水野先生に「学士は日本で取るんだからオーストラリアで修士に進めばいいんじゃない？」と後押しされ、修士課程に進むことを決意しました。私はこれまで行ったことが無く本土とは違った自然が見られるタスマニア州にある、タスマニア大学に進学することを決めました。オーストラリアには、3年ほどかけて研究をする Master by Research work と、1年目は授業を受けて単位をとり2年目は研究に専念する Master by Course work という2つの方法で修士号を取ることができます（コースや大学によって年数は異なります）。私は Master by Course work を選び、1年目は2年生や3年生と一緒に授業を受けて単位を取りました。1つの授業はほとんどが、午前中に2時間の座学と午後3時間の実習で構成されており、学んだことをアウトプットする機会が全ての授業でありました。2年目の研究ではウォンバットの疥癬を研究している先生の下でウォンバットとカンガルーの競争関係について統計的に解析しました。



写真提供：田村樹理さん（写真左）、授業のグループワークでポスタープレゼンテーションで賞を貰った時

覚悟していたものの語学の壁は想像以上に高く苦労しましたが、オーストラリアで学ぶ生態学は新しく知ることができました。野生動物や環境に関して深く勉強することができました。大変なことも多いですが固有の自然のど真ん中で生態学や保全学を学んだことは私の環境問題に関する視野を広げてくれました。留学の大変なことや大きな壁の話はよく聞きますが、留学をして後悔したという人を聞いたことがありません。もし検討している方がいたらぜひ挑戦してほしいと思います。

# 活動報告

2020年11月から2021年5月末まで

## オンラインセミナー、録画オンデマンドセミナー、オンライン教育、大好評実施中

昨年のコロナウイルス感染症勃発によりオーストラリアでは、未だ国境が閉鎖され日本から学生の皆様をお迎えできない状況が続いております。

多くの教育機関関係者・企業の皆様より毎年開催していた海外研修の代わりとして何か出来ることはないかをご相談を受け、弊財団ではオンラインセミナー、オーストラリアの環境や野生動物保護に関連した教育講座を実施しており、大変良い反響を頂いております。

また、個人の方でもお手軽な価格でセミナーを受けていただけるようにと実施しています録画オンデマンドオンラインセミナーも大好評を頂いております。会員様の割引価格も適応されますので、次回のオンデマンドセミナーの開催について随時ホームページをチェックしてみてください⇒[www.ajwcef.org](http://www.ajwcef.org)

## これまで実施されたオンラインセミナー

日時	視聴団体	演目
11月23日	大阪府立生野高校	水野哲男「オーストラリアにおける人獣共通ウイルス感染症とオオコウモリ」
11月18日	EPOC 環境パートナーシップクラブ	水野哲男「海洋のごみと海洋生物」
11月23日	東京コミュニケーションアート専門学校 ECO	水野哲男「海洋のごみと海洋生物」
12月4日	専門学校ルネサンス	水野哲男「コアラとその危機」 矢島斐子「オーストラリアウスイロイルカ」
1月7日	岩手大学	水野哲男「コアラとその危機」
2月17日	奈良女子大学	水野哲男「オーストラリアの野生動物保護と国際関係」
3月17日	共立女子大学	水野哲男「オーストラリアの野生動物保護と国際関係」
3月18日	国際自然保護連合日本委員会	水野哲男「共生への道標」
5月12日	倉敷芸術科学大学	水野哲男「海洋のごみと海洋生物」 水野哲男「コアラとその危機」

## 国際自然保護連合日本委員会 (IUCN-J) が主催する生物多様性国家戦略を考えるフォーラム、 オンライン分科会に参加いたしました。

Change Our Next Decade(COND)が主催する分科会では、次世代を担うユースが中心となり、様々な主体とともに「一般市民に対するライフスタイルの転換のための多様な主体によるはたらきかけの検討」を行うことを目的としています。今回、理事長水野がこの分科会にて「共生への道標」という基調講演を行い、その後、他の登壇者とともにパネルディスカッションに参加させて頂きました。

# 寄付

AJWCEF オリジナルチャリティー動画をご視聴いただいた方よりお寄せいただきました寄付金をクィーンズランド州にある野生動物保護施設へと届けて参りました。

皆様のご理解とご支援に感謝いたします。

❖ **RSPCA(Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals)**

**王立動物虐待防止協会 \$ 1000**

❖ **Wildcare Australia INC ワイルドケア オーストラリア \$ 500**

❖ **Bats Qld (Flying Foxes & Microbats) Inc. バッツ クィーンズランド \$ 500**



お知らせ

**AJWCEF オリジナルチャリティー動画 第2弾**

**「オオコウモリの危機～キーストーン種」**

まもなく公開予定です。こちらもお楽しみに！！

## 会員（個人・法人）募集 及び 支援寄付のお願い

皆さまのご支援が小さな命を助けます。

詳細は、AJWCEFのサイト[www.ajwcef.org](http://www.ajwcef.org)『入会・寄付』のページにお進みください。

ニューズレター発行元

オーストラリア野生動物保護教育財団本部事務局

発行責任者 水野 哲男

編集担当 モリス ゆう

ホームページ [www.ajwcef.org](http://www.ajwcef.org)

住所 PO Box 1362 KENMORE,  
QUEENSLAND, 4069, AUSTRALIA

電話 + 6 1 7 3 1 9 5 - 4 7 4 9

**AJWCEF**